

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

いつころからであろう、私は昆虫採集に①ムチュウになつていた。『昆虫の図鑑』(小学館学習図鑑シリーズ②)を見て、虫取り網、捕獲した昆虫を入れる毒管、昆虫を殺すホルマリン、昆虫を生きたまま持ち帰る三角紙、捕獲した昆虫を広げて形を保つ展翅台、展翅台、②デコウシヤ器、留め針、虫ピン、標本箱などを買つてもいい、四年生のころから夏休みのたびに、家の近くや多摩川の川縁にまで遠征して昆虫採集をし、その標本を提出していた。

(中略)

カマキリやキリギリスを飼つたこともある。キリギリス(そう思い込んでいたが、いま図鑑を調べてみると「ショウリョウバッタ」だったのかも知れない)には世界で一番長い名前をつけた。それは「ネーチャーリーズアラッドアラエッディーベンジャミンド」というのである。当時、宮城まり子の「玉のようにかわいらしいアラッドアラエッディーのほくら」という子供向けラジオドラマを聴いていたが、それを中核にして上下に當時知ったばかりの英語名を入れて合成したもの。

発想はとても③タンジュンなのだが、九歳ばかりの私は「大得意」で、二歳年下の妹にもそれを憶えさせ、「これは秘密だから、だれにも言っちゃだめだよ」と命じた。そのキリギリスの入った虫籠を子供部屋のペランダに吊るして、私と妹は、眼をさますと、「おはよう、ネーチャーリーズアラッドアラエッディーベンジャミンド!」、学校から帰つてくると、「ただいま、ネーチャーリーズアラッドアラエッディーベンジャミンド!」、そして寝るときも「おやすみ、ネーチャーリーズアラッドアラエッディーベンジャミンド!」と挨拶した。だが、そのネーチャーリーズアラッドアラエッディーベンジャミンドは一週間ほどで死んでしまった。

(中略)

昆虫採集の成果は、すべてなくなつてしまった。だが、それを埋め合わせるかのように、中学二年生(十四歳)の夏休みに作製した植物採集の標本(だから、四十七年前のもの)がすっかり残っている。それは十八種類あり、八月十九日と二十五日の一週間に採取したものであり、場所は当時住んでいた川崎市中原区である。

(中略)

北アルプスや富士山麓ではなく、私は家の周りのこうしたごく普通の土地で植物採集をしたのである。だから、当然のことながら、珍しい植物は何もなく、どこにでも生えているような雑草ばかり採取されている。

とはいえ、自分で言うのも気が引けるが、A3の画用紙に神経症のように丁寧に押し葉にされた植物群は、ちよつとした見ものである。それぞれ葉を白く細いテープで留めているが、形が崩れないように懸命に留めようとした自分の姿を想像すると、男の子らしいなあと思う。

おもしろいのは、たぶんそのために買つてもらつた牧野富太郎の『学生版 牧野日本植物図鑑』を参照にして、ラテン語の学名まで入れていること。

(中略)

それにしても、あの小便くさい「おおば」の学名が *Plantago major* *L. var. asiatica* *Denene* であり、④の道端にでも生えている「こがねやなぎ」の学名が *Scutellaria baicalensis* *Georgi* であつて、汚いどぶ川縁に生えている「はなはいばな」の学名が *Bothriospermum tenellum* *Fisch. et Mey. var. asperugooides* *Maxim.* とは、すごいものだ。当時の私はこれを書きながら、おかしくなかつたのであろうか。いや、おかしいどころか、たぶん植物図鑑でラテン語を引き当てて得意満面だったのだらう。

実際、ラテン語の学名はともかく、「和名」すら図鑑から探し当てるのは難しいのである。牧野富太郎自身、「附録 1 植物名の引き方」で、次のように書いてある。

(植物の)名称を知らずに実物が何であるかを知る場合、これは多くの植物図鑑を持つている人が実際上いかにして名称を求むべきかに苦しんでいる。あてもなくその植物に似たものを第一頁から四百

余頁にわたつて照し合せていては徒勞に終る場合が多い。(原文旧字)

このことを考えれば、十八種類もの植物の学名から和名までとにかく突き止めてあるのだから立派である。もちろん、いまあらためて調べてみると「うそ臭い」のものもある。というが、似ていそうで似ていないものもある。だが、私がすべての植物に強引に名称をかぶせたのではないことは確かである。なぜなら、その図鑑の索引に赤鉛筆でいくつも線が引いてあり、それらは標本になつていない十八種類の植物とは別のものであるからだ。たぶん、私はずつと多くの植物を採取したのだが、苦勞に苦勞を重ねて名称を突き止められないものは、泣く泣く④ハブいていったのであろう。

それにしても、独学でその道を究めた牧野氏の植物採集の仕方は、とても古風である。

植物の枝や葉や花(果実)を生きたまま押し水分を新聞紙にしみとらせて毎日中間の新聞紙をとりかえ、その湿つた新聞紙は晴天の日に天日で乾かしては乾燥したのととりかえる。このことは赤子のオシメをかえると同様に採集した翌日から一週間くらいは毎日日課として※励行する。

……翌日おし石をおろし、上の板をとり、新聞紙の間に挟んだ植物を一つ一つ⑤ゲンサする、葉のうらかえり、花のすれなどを指さき或はピンセットで整える。この時は昨日採集した時のことを思い出しながらとても愉快である。そして一つ一つの植物に深い愛着が湧いてくる。このように毎日一回或は余暇があれば朝に夕に中間のしめつた新聞紙をとりかえて一日も早く植物に含まれた水分を脱水して腐らないように植物の干物をつくるわけである。

(原文旧字)

じんわり好感の持てる文章である。なにしろ植物が好きで、すべてにおいてア イ、しかも貧乏な男という感じである。

当時の私は3歳という性格に通じるものがあつたから、おそらくこのとおりのことを一心不乱に「励行」したのであろう。それにしても、十四歳の少年が「オシメを取り替える」ように植物の新聞紙を取り替えていたのかと思うと微笑ましい。「学生版」なのだと思えば、学生(その大部分は男の子であろう)に向かつてこういう解説を書く牧野氏もおもしろい。

穿つてみれば、この解説の裏に、時代背景(図鑑の初版は一九四九年刊行である)が見通せる。当時の子供達は、母親が弟や妹のオシメを取り替えるところを見ていたのであらう、場合によっては手伝つたのであろう。

植物採集など「何の役にも立たないこと」である。植物採集の標本作製している少年の傍らで、「そんなことする暇があつたら、手伝つてよ!」と叫ぶ母親の音が聞こえてくる。

少年たちは、植物採集が許されるためにもオシメを取り替えるのを手伝つたのだ。私の家庭には赤ちゃんはいなかったが、当時ほとんどの家は(私の家も)とても貧しかった。4貧しいなか、黄色い電灯のもと、狭い部屋で、家族の視線を浴びながら、少年たちは昆虫採集を、植物採集を、つまり何の役にも立たないことを心躍らせて続けたのだ。これは、5すこぶる「健全な」ことではないだろうか。

※ 努力しておこなうことなく実行すること。(中島義道『孤独な少年の部屋』)

問一 ①⑤のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

問二 1・2とありますが、二つの話に共通しているのはどういうところでしょうか、答えなさい。

問三 3とは、どのような性格でしょうか。ア・イにそれぞれ、ちがう性質を表すことばを考えて入れなさい。

問四 4とありますが、これについて5と筆者が言っているのはなぜでしょうか。

「一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。」

中学一年生の「ぼく」は、整形外科病院の待合室で出会った老人に心ひかれていく。老人は詩人だった。「ぼく」は詩人の家を訪れた。

村田さんは満足そうに一冊のスケッチブックを取りあげた。文具店でよく売っているスケッチブックだった。

「ほら、プレゼントだ」

「ぼくに？」

「ああ、もやもやして言葉にならないものを、このスケッチブックの紙に貼りつけるんだ」

「さっきの、ビー玉やインスタント写真みたいなの？」

「ああ、シンラパンショウ、相手が何だつてかまやしねえ、まずは貼っちゃえばいい。大切なのは、自分ももやもやを感じた瞬間を採集することさ。」

そして、一枚ずつ部屋の壁にでも貼って、じつくりとむきあってみな。そこからもしも言葉がうきあがってきたら、さつとメモにでも残すんだな。きつと、少年の世界がちよっとだけ広く、深くなるぜ」

ぼくは受けとったスケッチブックの表紙をひらいた。何も描かれていない白い紙があった。……どうしよう。まったく見当がつかないまま紙を見ていると、村田さんはテーブルの中央に手を伸ばし、スケッチブックとほぼ同じ大きさの紙の束を取りあげた。

「これを見てごらん」

村田さんが差し出した紙の束には、上等な皮の表紙がついていた。ぼくはスケッチブックをテーブルの上におき、その表紙をなでてみた。何の皮かはわからなかったけど、滑らかな手触りだった。表紙には、〈あたらしい図鑑99〉と書かれたラベルが貼られていた。

「中を見てもいいですか？」

「望むところだ」

ぼくは呼吸を整えて皮の表紙をめくった。めくったとたん、息をのんだ。そこには、小枝に刺さったカエルの死骸があった。干からびたカエルは遠慮がちに万歳をするように左右の前後をあげ、筋張った後ろ肢を百八十度広げていた。

「こいつ、どうだい？」

「……どうだって、言われても」

ぼくはカエルから目をそらし、村田さんの顔を見た。

「なんだかうれしそうだろう。おそらくはモズにやられたと思うが、こいつ、納得した顔してるんだよな。こうなるのを待ってましたって顔だぜ。ウカトウセンの顔だ、うらやましい」

村田さんはカエルの顔を指さした。カエルの隣には、にじんだインク文字で〈天使・羽化登仙〉と縦に書かれていた。口をとじたカエルの顔は、言われてみればたしかに①笑っているようにも見えたけど、それよりも不気味さの方がまさっていた。ぼくはこんなものを紙に貼りつける村田さんが怖くなり、そっと紙をめくった。

今度は、……

何もなかった。

紙のいたるところにぼつぼつと丸く傷んだ箇所があるだけで、何も貼られてはいなかった。

「これは、……何ですか？」

「これは、雨のなごりだ」

「雨のなごり？」

「ああ、縁側に紙をおき忘れていたら、にわか雨が降ってきてな、気がついたときには、雨粒がうまいことちらばつていやがった」

ア村田さんの説明を聞いていたうちに、頭がぼうつとしてくるのがわかった。何が面白いのか、何がもやもやなのか、ぼくにはちたつとも理解できなかった。カエルの死骸はカエルの死骸でしかなく、雨粒は雨粒でしかないじゃないか。

「スクラップ、してみたか？」

「まだ、一枚も……」

「そうか」村田さんは麦藁帽子をかぶり、下顎をなでた。「じゃあ本日のお土産に、少年に短い詩を贈ろうかな」

「ありがとうございます」

「礼は後からだ」

ぼくが苦笑いをする、村田さんは目をほそめ、それから空を仰いだ。「くつがえされた宝石のような朝、なんびとか戸口にて誰かとささやく、それは神のせいだんの日」

時報代わりのメロディーが止んだ。ぼくが黙って突っ立っていると、村田さんはまた同じ詩を、同じように朗々と語った。

「どうだい？」

「うん」

「まあいいや」村田さんはほほえんだ。「これはニシワキジンザブロウという、おれの師匠、みたいな詩人の『天気』という詩なんだが、意味なんてわからなくていいから、とにかく、だまされたと思って暗記しておけ」

「……はい」

「意味なんてものは、ある日、ある時がくれば、ぱつとわかるもんさ。その瞬間、意味は、縁でも少年のものになる」

「……」

「いいかい、おれの詩を朗読する暇があったら、この詩を何度も口に出してみな。きつと、少年の身に幸運が舞いこむぜ」

村田さんはいきななき笑い、そしてまた咳こんだ。ぼくはその姿にあきれたつともかすかに胸の高鳴りを感じた。図書館の彼女の横顔が、咳きこむ村田さんの頭のむこう側にうつすらと見えた。

村田さんを縁側から家の中に押しあげて別れると、ぼくは教わった『天気』という詩を復唱しながら小川沿いの道を歩いた。国道にもどって永井総合病院が近づくころには、くつがえされた宝石のような朝の映像が、目の前にはっきりとかぶようになった。

それはお母さんが大好きなダイヤモンドだけじゃなく、ルビーや真珠やオパールや、名前も知らない宝石たちがあふれるような光を放っている朝だった。村田さんの庭で見た木もれ日のきらめきより何万倍もまぶしく輝き、とてもまともには見ていられないほどに美しい、奇跡のような朝。

ぼくは、1明日の朝、実際に家の玄関に立つてみようと考え、そのアイデアに気を良くしながら、病院の前にさしかかった。歩道と駐車場の境界には横長のプランターが並んでいて、ポピーが紫やピンクや白の花を咲かせていた。ぼくは暑さでしおれた花々を見おろしながら進み、最後のプランターの前で足を止めた。

そこには、四十センチほどに成長したひまわりが五本、植えられていた。暑い日がつづいてはいたけど、まだ五本とも茎はほそく、葉っぱはどれも薄い緑色だった。茎の先端にある花になる部分は、まだ緑色のブツブツがうかんできたところだった。あと一カ月もすれば、茎も葉もぐつとたくましくなつて、黄色い大きな花をつけるだろう。

だけど、ぼくにはもう、満開のひまわりが見えていた。図書館の彼女が着ていたワンピース。競いあうように大輪の花を咲かせるひまわりたち。

ぼくはあたりを見まわし、駐車場の先にある永井家の窓とベランダに人影がないのを確認して腰をかがめ、左から二番目のひまわりを引き抜いた。その瞬間、土の中にひろがっていた根がぶちぶちと音をたてて切れた。ぼくは背中を起こしながらもう歩き出し、根に土がついているのも気にせずひまわりを靴の中に隠した。

一度もふり返らずに帰宅したぼくは、すぐに自分の部屋に入り、机の上にあったスケッチブックから紙を一枚、破りとった。それから盗んできたひまわりを靴から出し、白い紙の上においてみた。

花のないひまわりはみすばらしかった。だけど、いや、だからこそ、ぼくは目の前の植物に興奮した。病院のひまわりを盗んだという罪悪感とは違ふ、もつと決定的にいけないことをしたという思いが湧きあがり、それが、ぼくをときめかせた。

ぼくはすでにしおれはじめたハート形の葉っぱに指を伸ばし、生死を確かめるようにそつと触れてみた。産毛に似た感触が、かすかに指先にひろがる。ぼくは気持ち悪さを落ちつかせるために時間をかけて息を吐き、ひまわりの根もとを折って紙の大きさに収まるよう工夫し、それからビニールテープで紙に貼りつけた。

ひまわりに貼ったテープは、全部で十一カ所になった。根に残った細かい土は机の上にはらい落とし、村田さんをまねてベッドの横の壁に画紙で止め、床に正座してしばらくながめた。距離をおいて見てみると、それがひまわりか何なのかよくわからなかった。道端によく生えている雑草のようだった。

だけど、ぼくは満足していた。そのみすばらしい植物を貼った紙からは、間違いない、ぼくの中にあるもやもやとして言葉にならない何か、あふれ出していた。

ぼくは汗に濡れた制服を着たまま、お母さんが帰ってくるまでベッドの脇の紙をながめつづけた。

翌朝は、雨だった。「梅雨入りしたから傘を持っていきなさいよ」とお母さんの声を聞き、ぼくは玄関のドアノブをつかんだまま雨空を恨んだ。

翌日も、その翌日も雨だった。

学校からまっすぐ帰ったぼくは短パンとTシャツに着替え、ベッドに寝転がってひまわりをながめた。

ますますしおれていくひまわりを見てみると、**②**彼女に会いたくなった。今この瞬間、いったい彼女は何かをしてくれているのか。勉強しているのか、それとも何かクラブ活動をやっているのか。まったく見当がつかないから、なおさら頭の中がざわついてしかたがない。ぼくは、彼女がバレーボールやバスケットボールをしている姿を想像しようと目をつむってみた。だけど、ひまわり柄のワンピース姿ばかりが頭の裏にちらついてくらくなってしまい、いつの間にか呼吸がおかしくなった。ついには背中に汗までかいて気持ち悪く、ぼくは起きあがってベッドからはなれた。

今度は、立ったままひまわりとむきあつた。

ひまわりは、たとえしおれていても、花がなくても、彼女にしか見えなかった。ぼくの目には、はつきりと彼女が映っていた。

ひらめいた。

ぼくは食堂のテーブルにあった昨日の新聞を持ってきて床にひろげ、その上にスケッチブックをおいて腰をおろし、両足のギブスをはずした。それから机のひきだしに手を伸ばして中にあった墨汁と書道用の太筆をとりだし、左足の裏に墨を塗りたくった。

筆先はこそばゆかった。特にギブスをあてていた足の中央部がむずむずし、ぼくは「ひやつひやつ」と声をあげながら筆を動かした。そして、踵の隅まで塗りおえると立ちあがり、スケッチブックの真上から足をおろした。

白い紙を踏みつけたままひまわりの花を見て十秒数え、**③**足を引きあげた。

右足だけで立つて下を見ると、紙の中央に、土踏まずのない黒い足形ができていた。墨をつけすぎたのか、一本のしわも写っていないかった。五本の指がなければそれが足なのか何なのかかわりにくい、べたつとした足形だった。

ぼくは左足をうかせ、捻挫が治った右足でケンケンしながら浴室へむかった。浴室でボディソープを足裏にくまなくつけ、お母さんが踵や肘の角質を落とすためにおいているブラシでこすってシャワーのお湯をかけた。墨はきれいに流れ落ちた。

タオルで足をふいて部屋にもどると、足形はもう乾いていた。ぼくはスケッチブックの紙を破り、ベッドの上にあがってひまわりの隣に画紙で止め、二枚の紙を見くらべた。

2しおれたひまわりも、しまりのない足形も、どちらもかなり不気味だった。なぜだろう、と考えるがぼくはもうしばらくながめ、それらが今までの見たことのないものだからだ、と思った。

しおれたり枯れてしまったひまわりなら、夏のおわりに何度も見たこと

がある。人の足形だって、小学校のプールサイドで何十人分も見てきた。だけど、こうして白い紙の上に固定された形で見ると、それらはまったく別物のようだった。

ぼくは思った。

この足形は、ぼくだ。

べたつとしたしまりのない足形は、つまり、ぼくなんだ。ひまわりを見るたびに彼女を思いだすように、この足形を見てみると、まるで写真やビデオに映った自分を見ているような気分になる。野球をしているぼく。トモと並んでVサインをしているぼく。お父さんとお母さんにはさまれて動物園のキリンの前に立っているぼく。そういった昔の光景だけじゃなく、足形を見ている今のぼくの気持ちまで、足形に反映されているような気がしてくる。

イこういう気分をなんと言うのか、ぼくにはわからない。きつと**「言葉」**があるんだろうけど、ぼくはまだ知らない。だけど、言葉は知らなくても、気分だけはもうぼくの中にある。まだもやもやした感情だけど、それは実感できる。

でも……言葉がない。

「ところで」村田さんはテーブルの脚もとにある灰皿で煙草の火をもみ消し、ぼくのスクラップを手にとった。「これ、面白かったぜ」

「ありがとうございます」

「礼なんかいらねえよ。おれはただ、面白かったと言っただけだ」

「でも、こんなでいいのかどうか、自信がなかったから」

「いいも悪いもあるもんか。大事なのは、ここに、あなたの言葉にならない感情が採集されているか、どうかだ。たとえば、この貧弱なひまわりが醜いまでに枯れ果てても、あなたが見れば、他の人間には見えないものが感じられる。あなたの中にある何かが、すつとよみがえる。それは、あなたの目にも見えないけれど、あなただけではそのものの深さや、豊かさに近づくことができる。それは、真夏の日ざしもとどかない、暗い海底の、さらに岩陰のような場所で、原始の言葉を抱いてうたた寝をしているんだ。でもな、気まぐれな詩の女神が運よく手助けしてくれたら、あなたは、その言葉を手にいれることだってできる」

村田さんはそこで話を切り、苦しうにひとつ咳をした。

「どうだい、わかるかい？」

ぼくは、村田さんがぼくを「あなた」と呼んだことに緊張していた。

「前よりは、……少し」

「いいかい、詩は、あなたの詩は、いつだって見えないところに隠れているんだ。だから、まずは目をつむるんだ」

「はい！」

そうきつぱりと返事をしたけど、もちろん、村田さんの話の中身を全部理解できたわけじゃなかった。だけど、こうして村田さんを見ているだけで、村田さんと話をしていてだけで、詩がどんなものか、少しはわかるような気がした。もつと正確に言ううと、ぼくには、村田さん自身が詩そのもののよう思われてならなかった。

(長瀬安造「あたらしい図鑑」)

問一 **①** **③**に入る最も適当な言葉を、次から選び記号で答えなさい。

ア 何気なく イ 無性に ウ 大胆に エ 慎重に オ 満足げに

問二 1とありますが、「ぼく」は、何を期待したのでしょいか。

問三 2「不気味」なのは「今まで見たことのないものだからだ」と言っていますが、どういうことですか。くわしく説明しなさい。

問四 どのように感じていた「ぼく」が、どのように感じました。

「ぼく」はどのように変わったのでしょうか。二〇〇字以内で答えなさい。

問五 **「イのそれ専用の言葉」**とは、どう言いかえられますか。文中から

五字程度の語句をさがして抜き出しなさい。

には記入しないこと。

200